

岡崎市東公園の志賀重昂

式 正 英

父は岡崎藩士、志賀重職、控堂（こうどう）と号したが、藩主の命で昌平黌に学んだ儒者でもあった。母方も藩代々の儒家で、その子が「日本風景論」を世に問うた志賀重昂その人である。同書は内村鑑三の著わした「地人論」と共に岩波文庫に収録されており、両者を明治の二大地理書と呼ぶことを知る人は多かろう。内村も志賀もともに札幌農学校出身者で同窓生の訳だが、前者は在学中にクラークの影響をうけ、地理学者というよりは思想家、厳格なクリスチャンとして通っている。後者は官職にも就いたし、政治家になった時代もあったが、より地理学者だと言ってよかろう。両者に共通して言える点は地理学を志しながら、時代の要請に応じて巾広い活動をした啓蒙家であったことである。昨秋（1988年9月下旬）刈谷で日本地理学会が開催された折、重昂の出身地の岡崎を訪ねてみる機会をつくった。東京で重昂の事蹟を採す事はもはや容易ではないが、岡崎では郷土の著名人は徳川家康の次は志賀重昂であった。

松井貞雄（愛知教育大）氏を介し意を通じておいたお蔭で、岡崎市の観光課と教育委員会が案内に立って頂けたのだが、行先地はその東公園という処であった。市街地の東縁にある38ヘクタールほどの市立公園で、市民憩いの場所である。実はこの公園の内部に重昂の足跡が色濃く残されているのであった。

まづ東京代々木の志賀邸内に1911年（明治44年）に建てられた茶室兼集会室の「四松庵」は、1929年（昭和4年）岡崎市に寄付され、東公園のひょうたん池の畔に移築され、「南北亭」と呼ばれている。この建物はサハラ砂漠の砂、樺太のトド松、台湾の大竹など、重昂が旅行先から集めて来た世界各地の材料で建築されている。この珍しい建物はいさゝか著名であり、重昂の世界へ向けた目が如実に窺える。その東の方に重昂の墓があり分骨が収められている。墓が又変わっていてインド様式のスツーパー（「卒塔婆」の語源にあたる）で、花崗岩を刻んで造った擬ったものである。

やはり同じ公園内にある世尊寺を訪ねてみて、意表を突かれてしまった。入り口が坂になっているが横に

看板があり、「岡崎の生んだ世界的先覚者、志賀重昂先生の発願創建に成る世尊寺」とある。早速案内を請い住職のお話を聞くと「東天竺山世尊寺は世界的地理学者志賀重昂先生開基の寺で、昭和4年4月に完成した。山号は先生の命名により、本尊も脇仏も先生がタイ、インドなどから集めて来られたもの」と言う。大旅行家の重昂は、やゝ晩年の大正11年、12年にも続けて各8ヶ月にわたる世界旅行に出かけ、大正13年7月62才で帰国している。この時長年世話になった郷里の岡崎の人々へ感謝の意を表わすため、岡崎市にコレクションを寄付し、それを収める釈迦堂（後の世尊寺）を建てる計画をたてた。市長は市議会の同意を得てその土地の提供を引受けたようである。重昂は昭和2年4月に病を得て亡くなるが、まだ釈迦堂の建設は半ばであった。自ら発願した寺の完成を見届けられなかった無念はあったであろうが、彼の遺志は岡崎市によって受継がれ、世尊寺は没後2年を経て完成した。

僧籍以外の人の発願による寺の創立も珍しいが、地理学者開基の寺は他に例があるまいと思う。仏教の既成のどの宗派にも属さないため、無宗派の寺であり、誰の菩提寺でもないのだから壇家もない。「それではお経はどうするのか」お尋ねした所、「岡崎市の諸寺が加盟している仏教会の会長が住職を兼務してこの寺を運営することになっている。そのため会長の属する宗派のお経が読まれている。」と言う。たまたま曹洞宗の寺の住職なら曹洞宗のお経、今は4代目で日蓮宗の円頓寺の住職が兼務するから日蓮宗のお経である。住職が異なるごとにお経が異なるのは、余り判り易い話ではないが、重昂の世界主義的理想が形になったよい例である。同窓の内村鑑三が無教会派の指導者として有名になったのと比較して、重昂が無宗教の仏教寺院の創設を日ざしたのは偶然とは思えない気がする。

東公園の重昂ゆかりの記念物はまだ他にもいくつかある。東名道を隔ててはいるが園域の中に、最近地元ライオンズクラブによって建てられた重昂の銅像があり、その近くに重昂作の歯切れの良い漢詩を刻んだ「三河男児の歌碑」が建っている。